

# 火災への関心が消火設備の設置場所の記憶に及ぼす影響の検討

松本 真菜子

## 【背景と目的】

建物内に設置されている消火器や屋内消火栓設備などの消火設備は、初期消火を行うための重要なアイテムである。そのため、火災発生時には素早く消火設備が設置されている場所へ向かえるよう、人々は日頃から消火設備の設置場所を把握しておくことが望ましい。

しかし、先行研究においては、自分が普段使用している部屋に最も近い消火器の設置場所を多くの人が正確に記憶していないことが示されている (Castel et al., 2012)。また、この先行研究では、消火設備の設置場所を記憶している人も少数ながら存在していたが、消火設備の設置場所を記憶している人と記憶していない人で何が異なるかは明らかにされていなかった。しかし、より多くの人が消火設備の場所を記憶できるようにするためには、どのような人が消火設備の設置場所を記憶しているのかを明らかにすることが重要である。そこで本研究では、先行研究における、関心の高いものほど記憶に残りやすいという知見に着目し、火災への関心の高さと消火設備の設置場所の記憶に関連が見られるのか検討することを目的として、3つの調査を実施した。

## 【調査 I】

調査 I では、火災への関心の高さと消火設備の設置場所の記憶の関連を検討する調査の実施に向けて、火災への関心を測定する尺度を作成することを目的とした。先行研究から、防災意識や健康への意識など、自身の身の安全に関わることに対する意識や関心について尋ねた尺度を引用し、それらを火災の場面に適用させて火災への関心を測定するための質問項目を 26 項目用意した。その上で、オンライン調査を実施して参加者に作成した質問に回答してもらい、探索的因子分析を行って、火災への関心の高さを測定する尺度の作成を試みた。

調査対象者は 18 歳以上の日本語を母語とする男女で、316 名を分析対象とした。探索的因子分析の結果、26 項目のうち 13 項目を採用し、3 因子構造の「火災関心尺度」を作成した。第 1 因子は「火災や火災予防への興味関心」(項目例：火災に関する情報に興味がある)、第 2 因子は「被災状況に対する想像力」(項目例：火災発生時に人々がどのような行動を取るか具体的なイメージがある)、第 3 因子は「火災に対する不安」(項目例：火災が自分の身の回りでいつか起こるだろうと常に感じている)と名付けた。

## 【調査 II】

調査 II では、火災への関心と消火設備の設置場所の記憶の正確性が関連するかを検討することを目的とした。大学内の研究室を訪問し、調査 I で作成した火災関心尺度への回答と普段使用している建物内の消火設備の設置場所を問う記憶課題への回答を依頼した。分析対象者は 49 名(事務職員 10 名、教員 8 名、大学院生 23 名、学部生 5 名、研究生 1 名、その他 2 名)であった。記憶課題では、各参加者の部屋から最も近い消火設備の設置場所を思い出してフロアマップに印をつけるよう求めた。分析の際は、正しい消火設備の設置場所から参加者が記入した印までのずれの大きさを測定し、ずれが小さいほど正確に記憶できているとした。

重回帰分析の結果、火災関心尺度の各因子は、消火設備の設置場所の記憶に有意な影響を与え

ていなかった。また、正しい消火設備の設置場所付近に印を記入できた人が9名のみであったことから、火災に対する関心が高いかどうかに関わらず、消火設備に対して非注意性盲目 (Simons & Chabris, 1999) や非注意性健忘 (Wolfe, 1999) が生じていることが示唆された。つまり、火災そのものへの関心は、消火設備に注意を向けることや消火設備の設置場所の記憶の定着にはつながっていないと考えられる。

さらに本調査では、火災への関心以外に消火設備の設置場所の記憶に影響する要因を探索的に検討した。その結果、教職員は学生よりも自分の部屋から最も近い消火設備の設置場所を正確に記憶していることが示された。教職員は、火災が発生した際に率先して初期消火にあたるという役割意識が学生に比べて強いため、火災発生時における自身の役割の認識が消火設備の設置場所の把握につながっている可能性がある。

### 【調査Ⅲ】

調査Ⅲでは、調査Ⅱで明らかになった記憶課題における課題点を改善した上で、火災への関心と消火設備の設置場所の記憶の正確性が関連するか検討することを目的として、参加者に火災関心尺度への回答と建物内の消火設備の設置場所を問う記憶課題への回答を依頼した。記憶課題は、建物内の全消火設備の中で、消火設備が設置されていることを記憶している場所に印をつける形式であった。印の記入においては、確実に設置場所を記憶している場所のみ印を記入し、1つも記憶していない場合は何も記入しないよう教示した。分析対象者は、大学2年生36名であった。

調査の結果、記憶している消火設備の設置場所を記入した人が7名に留まり、その中で実際に設置されている消火設備付近に印を記入できた人は4名のみであった。そのため、本調査では火災への関心と記憶の正確性の関連について検証する統計解析は実施しなかった。印を記入しなかった人が8割以上に上った要因として考えられるのは、参加者の大多数が消火設備に注意を向けておらず、館内の消火設備に対して非注意性盲目や非注意性健忘が生じていたということである。

### 【総合論議】

調査Ⅱと調査Ⅲに共通していることは、消火設備付近を頻繁に通行しているにも関わらず、消火設備の設置場所を正確に記憶している人が少なかったことである。このことから、消火設備に対して人々は注意を向けておらず、非注意性盲目や非注意性健忘が生じていることが明らかになった。人間は様々な情報が渦巻く複雑な環境下で、その時々状況に応じて、重要な情報を選択的に処理する必要がある (沖田, 1989)。そのため、日常において利用頻度が極めて低い消火設備は、注意を向ける対象から除外されやすいと考えられる。

本研究は、日頃過ごしている建物の中に設置されている消火設備の設置場所を大半の人が把握できていないという現状を明らかにしたと言える。火災発生時には、平常時に比べて大きな不安やストレスを抱えた状態で消火設備の場所へ素早く向かう必要があるため、この現状を改善し、より多くの方が消火設備の設置場所を記憶している状態にする必要がある。そのためには、本研究のような消火設備の設置場所を問う記憶課題を実施することが効果的と考えられる。なぜなら、消火設備の設置場所を思い出す機会を作ることで消火設備の印象を強め、普段は使用しないそれらに対して注意が向きやすくなると考えられるためである。よって今後同様の調査を行う際には、数ヶ月後に再度調査を実施し、消火設備の設置場所を想起することが、その後の設置場所の長期的な記憶につながるか検証する必要があるだろう。(安全行動学)